

重度・重複障害児の表出行動と他者との相互作用の関係に関する研究

数井 智子

I. 問題

重度・重複障害児（以下重障児と略す）とのかかわり合いについて、土谷・菅井（1998）は、どのような微細な表出であっても、子どものそれらの行動をかかわりの糸口として、行動の意味をさぐり、軌道修正を加え、場の構造と、文脈から意味を捉えていくことを強調し、情動的にも、活動内容的にもかかわり手と一体となった活動を、相互的・共同のかかわり合いとする。このような視点により、かかわりにおいて外界との関係で子どもとの間に生じた現象について、分析的に明らかにする必要があると考えた。

II. 目的

1. 対象児の表出行動において、外界との仲立ちとしての「スイッチ」を用いたかかわりをもつことで、対象児の表出行動がどのような質的変容をもたらすかを探る。
2. 重障児が、かかわり手と共に取り組む活動において、かかわり手と重障児の相互作用の様相を分析するとともに、かかわりにおける相互性と共同性を規定する要因について検討する。

III. 方法

1. 研究者の位置づけ

生活全般にわたる観察者、教育相談におけるスイッチ場面実践者及び、訪問教育場面 VTR 撮影者。

2. 対象児

対象児は、肢体不自由養護学校小学部2年（訪問学級）に在籍する男児。ダウン症候群。心室中隔欠損、動脈管開存症により生後8ヶ月に心臓手術を受ける。その後、低酸素性脳症、四肢麻痺、水頭症、視覚障害、重度知的障害の診断がなされている。

3. 手続き

対象児の家庭、訪問教育（自宅）、教育相談（J教育大学障害児教育実践センター）における生活全般にわたる行動観察を行うことにより行動目録

を作成する。それをもとに、対象児の表出行動を総合的に分析しながらかかわりをすすめることを前提とする。

①スイッチ（スイッチと接続するモノは1対1でつなぐ。複数のモノを使用する場合は、別々のスイッチにつなぐ）を用いたかかわり合いの場面を設定し、かかわり合いにおける対象児の表出行動の変容を追う。これらは、全て VTR に記録する。さらに、②対象児の表出行動を音楽やかかわり手の声かけなどの外界との関係でプロットする。③その過程で、対象児独自の表出行動との関連により、対象児とかかわり手の相互作用の実態を明らかにする。相互作用の分析対象場面は3場面である。その場面について、④対象児とかかわり手の相互作用成立状態と相互作用成立水準をコミュニケーション単位(CU)（三宅ら、1974）とインタラクション単位(IU)（三宅ら、1974）により把握する。さらに、⑤相互作用成立状態（伊藤・西村、1999）、相互作用の持続時間、活動の全体的な相互作用の推移を分析することにより、共同的・相互的活動の規定要因に迫る。

実施期間は訪問教育が2003年4月から2004年5月までで54セッション、教育相談が2003年7月から2004年9月までで23セッション（スイッチ関係は内20セッション）を設けた。

IV. 結果

1. 表出行動の変容について

1)スイッチに関連した動きの開拓と活用について
様々なスイッチを試した結果、身体部位としては頬で入れる、スイッチの種類としてはライトタッチイ

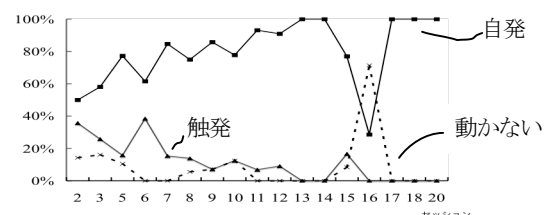


図1 セッションにおけるスイッチの自発率

ツチ (LTS) を採用した。対象児のスイッチ入力について、「自発」「触発」「動かない」の3条件により分析した (図1)。スイッチを自発的に入れる動きは、徐々に増えセッション17以降は100%の確率で入れられるようになった。

2) 表出行動の特定化と洗練化および多様化について

毎回のセッションをビデオ記録により振り返り、行動目録とのつきあわせにより、「口鳴らし」「首振り」「口鳴らし+首振り」を対象児独自の表出として特定化し、「かかわり手の方を向く」「モノの方を向く」という視線に関する動き、「手の動き」「笑顔」も含めて外界とのかかわりでどのように変容していくかを見ていくことにした。

かかわり合いの初期段階において、対象児の表出行動はほとんど観察されなかった。セッションを重ねることにより、まず音楽や音との関連で口鳴らしが表出した。かかわり手が、対象児がスイッチをスムーズに入れられるように位置取りへの配慮をする過程において、対象児が手持ちの力を調整し「口鳴らし+首振り」によりスイッチを入れるようになった。また、スイッチを呈示してからスイッチオンに至る時間がある程度まとまってきた (図2)。さらに、手を跳ね上げてスイッチを入れる、かかわりの文脈にそった柔軟な視線の動きも観察されるようになった。

3) 表出行動とかかわり手との関係について

セッション17以降、対象児の「口鳴らし」が、かかわり手の声かけに対応するように観察されてきた。

2. 抽出3場面の相互作用の分析結果

筆者が、訪問教育と教育相談の場面から、対象児が生き生きとしていたと感じられた2場面 (「1.2.1.2!」「伸び伸び体操」) と、感じられな

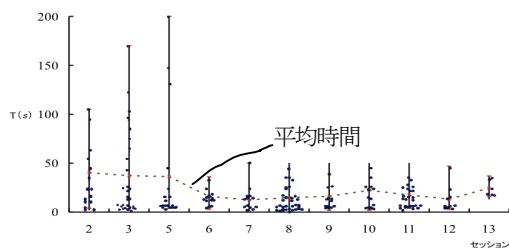


図2 スイッチ呈示—スイッチオンの時間

かった1場面 (「水遊び」) を抽出した。

1) 3場面の相互作用成立状態について

分析対象3場面での子どもとかかわり手のやりとりを示す相互作用の成立状態をA水準 (相互作用成立状態)、B水準 (相互作用成立寸前状態)、C水準 (相互作用不成立状態) に分け、さらに行動の開始者が子どもから (I, III, V)、かかわり手から (II, IV, VI) の別により3水準6型に整理した。対象児が行動の開始者で活動として展開されている割合が最も高いのが、「伸び伸び体操」でA水準I型(A-I)が53%を占めていた。「1.2.1.2!」はA水準II型(A-II)が54%、「水遊び」はA-IIが47%と高い割合を示していた。

2) A水準IUの持続時間

A水準の相互作用持続時間 (図3) は、双方向的なやりとりがどのくらいの時間続いたかを示したものである。

「1.2.1.2!」はA-IIの持続時間が、凸凹である。「伸び伸び体操」はA-IもA-IIも持続時間が長く、A-Iは右肩上がりの形態を示した。「水遊び」はA-IIの持続時間が減少していく形態を示した。

3) 相互作用成立水準の推移について

対象児とかかわり手の相互作用は、対象児の表出をかかわり手が表出確認をする、ことばで返す、対象児を見ているなどの形で成立していた。

図4-1は、かかわり合いの始まりの段階においては、対象児とかかわり手が、B, C水準のやりとりをし、後A水準が続く安定した形に収まっている。図4-2は、かかわり合い全体が安定して高水準を維持している。図4-3は全体的にB水準を中心に行われ、安定した相互作用成立状態は見られない。

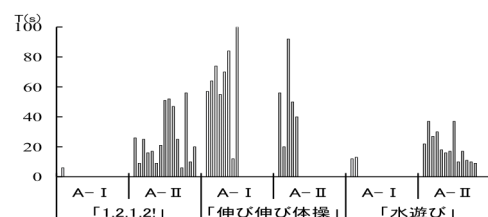


図3 A水準 相互作用持続時間

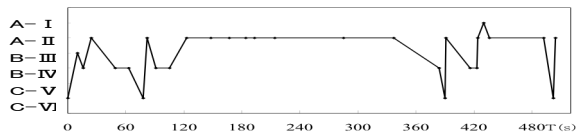


図4-1 「12.12！」

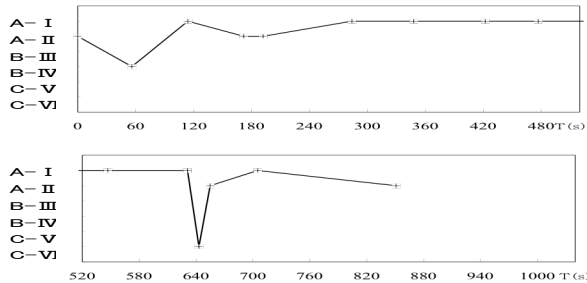


図4-2 「伸び伸び体操」

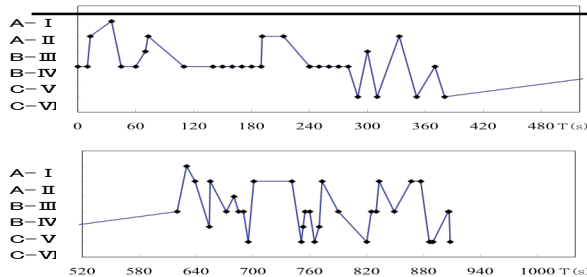


図4-3 「水遊び」

V. 考察

1. 表出行動の変容について

図1は、対象児が自発的にスイッチを入れることが右肩上がり増加していること背景として、かかわり手が、対象児の姿勢保持の仕方、見え方、また、対象児の興味・関心に基づいてスイッチに接続するモノの工夫を行うなどの状況を整える作業があった。スイッチを入れること自体は、対象児とかかわり手の一体的な作業であり、また、スイッチを入れることに伴う活動を考えることは、情動的に一体となるための作業であった。この過程において、対象児は、能動的にスイッチを入れるようになり、表出行動を活性化させ、スイッチを入れる場面においては手持ちの力を調整した。その結果として図2に示したスイッチを入れる時間のばらつきがセッション6以降まとまってきたと考えられる。

2. 相互作用の分析から

かかわり合いをCU,IUの単位に置き換え、相互

作用の成立状態を分析した。全体的な相互作用成立水準において、A,B水準の割合が高いことは双方向的な相互作用が成立していると考えられる。相互作用の質的な面を分析すると、A水準のIUごとの持続時間(図3)が徐々に伸びていることや、全てのIUをプロット(図4)し、推移を概観してみると、A水準で平らな状態になる部分があるかどうかによって、子どもが生き生きとしたかわり合いが展開されていたかどうかの判断ができるのではないかと考える。B-IVは、かわり手が働きかけて子どもが応答する型である。この型における子どもの反応において、やりとりが発展していかないということは、かわり手の働きかけに対するあるいは、活動内容に対する拒否を子どもが示していると考えられる。従って、相互作用を発展させられるか、先細りで終息するかという意味において重要な型であると指摘できるのではないだろうか。

3. 規定要因について

1) 子ども側

呼吸や見えの状態に適した姿勢でかわる。見えや視線を生かすことは相互作用を成立させる上で重要であり、先行研究による知見を取り入れながら実践の中で子どもの見えの状態を探りながら、子どもに合った形でモノの提供を行うこと。

2) かかわり手

子どもの表情や視線を含め子ども特有の表出行動は、相互作用を成立させる上で大変重要な指標であることから、緻密な観察を行い、実践に生かすための準備を行うことが大切である。

子どもの表出を的確に受け止め、子どもの興味・関心を探る作業を、かわり手の準備として行い、実践の中で「遊びの質」を保証することで返していくというかわり手の力量の問題は大きい。

文献

- 伊藤恵子・西村章次(1999)自閉性障害を伴う子どもの相互作用成立要因に関する分析的研究、発達障害研究、20(4)、316-330。
三宅和夫・若井邦夫・伊藤則博・後藤守・浜名紹代・臼井博・吉村典子(1974)乳幼児発達研究の探求、北海道大学教育学部紀要、23、1-66。
土谷良巳・菅井裕行(1998)盲ろう二重障害における初期的なひととの係わり合い—相互的「やりとり」としての対話に至る経緯について—、国立特殊教育総合研究所研究紀要、25、83-98。